

口頭産出と作文産出における主題化の違い

— I-JASにおけるST・SWを対象に —

伊藤 聖子*

1. はじめに

話しことばと書きことばでは、産出できる内容に違いがあるのであろうか。書きことばは話しことばに比べて、内省の時間が取れたり、プランニングタイムが取れたりすることから、産出できる文が複雑であるとされる。また、文法項目によっては、口頭の場合と作文の場合では用法が異なる文法項目もある。その一つに主題化がある。

そのような文法項目において、同じ課題を口頭で産出する場合と作文で産出する場合にどのような違いが見られるのであろうか。

2. 先行研究

以下では同様のタスクにおいて書きことばと話しことばで産出に違いがあるかどうかを検討した先行研究を見ていくこととする。

迫田(2019)では、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language)」(以下:I-JAS)に収録されるSPOTの結果から中級にあたりと判断できる180名分のストーリーテリング(以下:ST)1及びストーリーライティング(以下:SW)1のデータ(15人×12言語)を対象に、書くタスクと話すタスクの違いについて調査を行っている。調査対象としたのは、言語の複雑さと正確性である。言語の複雑さについては、「受身」と「～てしまう」

を調査し、正確性については「有体自他動詞」「助詞」を調査した。その結果、話すタスクより書くタスクのほうが「受身」や「～てしまう」の使用が多く言語形式が複雑になる傾向があるとし、プランニングタイムの影響を確認している。また、話すタスクの誤用が書くタスクで必ずしも正用に変化するとはいえないこと、「助詞」が誤用のまま残る割合が高いことから、プランニングタイムの影響があるとは言えないとしている。

また、村田(2019)はI-JASに収録されている609名のST 1, 2 SW 1, 2を対象に、異なる作業による同一課題の違いを比較検討している。その調査項目は、産出語数の違いと特徴語の違いについてであるが、話しことばは語彙量が多く、書きことばは習熟度が上がると多様に用いることができることがわかっている。また、習熟度が上がると書きことばと話しことばが似てくるとしている。

3. 研究課題

先行研究の結果から、同一課題でも口頭で産出する場合と作文で産出する場合には違いがあることが明らかとなっている。主題化の発達過程においても口頭産出と作文産出に、違いがあるのであろうか。そこで、本研究では同様の課題を口頭産出と作文産出で比較し、主題化の発達過程に違いがあるのか、あるとすればどのような違いがあるのかを調査することを目的とする。

*早稲田大学日本語教育センター
非常勤インストラクター

研究課題 1：口頭産出データと作文産出データの
主題化の発達過程は同様の過程を経るか
研究課題 2：口頭産出において主題化された文は、
作文産出においても主題化されるのか

4. 調査方法

I-JASに収録されているST 1, 2 及びSW 1, 2 を調査対象とし、そのうちの中国語を母語とする日本語学習者（以下CCM）50名、韓国語を母語とする日本語学習者（以下KKD/KKR）50名、英語を母語とする日本語学習者（以下EAS/EUS）50名の150名を分析対象とする。

分析の枠組みには、日本語における主題の発達過程を明らかとしているKawaguchi (2015) を用いることとする。Kawaguchiで明らかとなっている主題の発達過程を以下に示す。

<主題仮説による発達過程>

- ①主語と主題が同じである「TOPSUBJOV」
例) 昨日、田中さんはこの手紙を書いた。
- ②付加詞などを文頭において主題化「TOP+SOV」
例) 昨日は 田中さんがこの手紙を書いた。
- ③語順がかわる主語以外の必須語を主題化する「OBJ topicalization」
例) この手紙は 田中さんが 書いた。
(Kawaguchi 2015、下線および漢字表記は筆者)

分析手順は以下のとおりである。

- ①I-JASの日本語学習者（150名）のST 1, 2「は」が含まれる文をすべて検索する。
- ②Kawaguchi (2015) に基づいて発達段階を確認すべく、「は」に先行する名詞句が主格、付加詞、必須語のいずれであるかをもとに分類し、その産出数をカウントする。
- ③ST 1 の 5 コマ目の必須語の目的語検索し、該当名詞句につく助詞に基づき分類する。

- ④ST 1, 2 で使用した「には」を検索し、別課題における同一箇所「には」の使用状況を確認する。

5. 結果及び考察

5.1 主題化の産出状況

研究課題 1 にあげた主題化の発達過程をKawaguchi (2015) に基づいて確認すべく、ST 1, 2 およびSW 1, 2 に含まれる助詞「は」、「格助詞+は」に含まれる文を対象に主題の発達過程について調査する。

5.1.1. 口頭産出 (ST) の結果

まず、口頭産出における「は」及び「格助詞+は」の発達過程について確認する。ST 1, 2 で現れた「は」及び「格助詞+は」の使用分布表を作成し、Implicational Scale¹⁾を用いて、再現性指数 (Crep.) 及び拡張性指数 (Cscal.) を産出した。その結果、 $n=150$, $Crep.=.95 >.90$, $Cscal.=.55 <.60$ となり、含意的関係は確認できなかった。なぜ確認できなかったのか、Kawaguchi (2015) の結果と照らし合わせたところ、Kawaguchiと異なり付加詞の主題化よりも目的語の主題化のほうが多いことがわかった。日本語母語話者の産出状況についても確認したところ、付加詞の産出が12%と目的語の主題化に比べ少ないことがわかった。そこで、課題の設定上、時や場所などの付加詞の主題化がされにくい可能性があるかと判断し、付加詞の主題化を除いて、再度検定を行った。その結果は、 $n=150$, $Crep.=.98 >.90$, $Cscal.=.72 >.60$ であり、「主語 (は) →目的語 (は) →には→では」の順で含意的関係があることが確認できた。

次に習熟度別に産出者数をみた場合の結果を表1に示す。主語は初級から「は」で主題化が産出でき、中級以降では目的語及び付加詞の主題化と格助詞「に」をともなう「には」の産出が可能であると考えられる。

表1 レベル別産出者数及びその割合 (ST)

| | 主語 | 目的語 | 付加詞 | には | では | へは | とは | よりは | からは |
|----|------------|-----------|-----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 上級 | 30 100% | 15 50% | 6 20% | 3 10% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 0 0% |
| 中級 | 102 99% | 32 31% | 20 19% | 7 7% | 1 1% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 0 0% |
| 初級 | 17 100% | 0 0% | 0 0% | 1 6% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 0 0% |

5.1.2. 作文産出 (SW) の結果

続いて、作文産出における主題の発達過程を確認する。SW 1, 2における「は」と「格助詞+は」の使用分布表を作成し、Implicational Scaleを用いて、再現性指数及び拡張性指数を産出した。その結果、 $n=150$, $Crep=.93>.90$, $Cscal=.19<.60$ となり、含意的関係は確認できなかった。そこで、口頭産出と同様に付加詞の主題化を除いた場合についても産出した。しかし、その結果も $n=150$, $Crep=.92>.90$, $Cscal=.52<.60$ となり基準を満たさなかった。

表2 レベル別産出者数及びその割合 (SW)

| | 主語 | 目的語 | 付加詞 | には | では | へは | とは | よりは | からは |
|----|-------------|-----------|-----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 上級 | 30 100% | 12 40% | 3 10% | 7 23% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 1 3% |
| 中級 | 103 100% | 28 27% | 12 12% | 6 6% | 1 1% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 1 1% |
| 初級 | 17 100% | 1 6% | 1 6% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 0 0% | 0 0% |

表2は習熟度別にみた結果を示すが、主語の主題化も目的語及び付加詞の主題化もSTの場合と同様のレベルから産出が可能である²⁾と判断できる。また、格助詞「に」を伴う「には」についても同様の結果であった。

5.1.3. 考察

以上の結果から、主語の主題化は初級から、目

的語及び付加詞の主題化は中級から処理可能になると考えられる。そして「には」のような格助詞を伴う主題化についても中級から処理可能になるものと考えられる。

そして、使用の広がりを確認したところ、STでは使用の広がり認められるが、SWでは使用の広がり認められない結果となった。つまり、口頭で産出される主題化と作文で産出される主題化の文には違いがある可能性が明らかとなった。

5.2. STとSWの産出状況の違い

次に、研究課題2の口頭と作文で産出される文に具体的どのような違いがあったのかを明らかにするため、「目的語の主題化」と「に」の主題化である「には」についてみていくこととする。目的語の主題化も格助詞「に」の主題化である「には」も、ともに中級で処理が可能になったと考えられる。口頭と作文でどのような違いがあるのか、それは習熟度によって異なるのかを以下で検討する。

5.2.1. 目的語の主題化の産出

ST, SW 1の5番目のイラストにあるサンドイッチ、りんごといった目的語を表す文をすべて収集し、「サンドイッチ」などの名詞句に使用される助詞別に分類する。結果は以下の表3のとおりである。

表3 目的語につく助詞別産出者数

| | は | を | が | も | 無助詞 | なし | その他 |
|------|----|----|----|---|-----|----|-----|
| 初級SW | 2 | 15 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 中級SW | 34 | 31 | 22 | 6 | 6 | 4 | 0 |
| 上級SW | 13 | 7 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 計 | 49 | 53 | 24 | 8 | 8 | 6 | 2 |
| | は | を | が | も | 無助詞 | なし | その他 |
| 初級ST | 2 | 8 | 4 | 0 | 2 | 1 | 0 |
| 中級ST | 33 | 40 | 16 | 1 | 9 | 3 | 1 |
| 上級ST | 14 | 11 | 2 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 計 | 49 | 59 | 22 | 4 | 11 | 4 | 1 |

「は」による主題化の産出者数はSTとSWで同数であり、「も」による主題化はSWのほうが多い結果であった。そして、格助詞「を」、「が」で産出している人数はSTとSWで大きな差がなかった。無助詞についても同様であった。

では、口頭で産出する場合と作文で産出する場合、同様の文が産出できているのであろうか。表4ではタスクが違っても産出される文が同じ対象者と、タスクが違おうと異なる対象者の数を習熟度別に示す。産出に習熟度とタスクの違いによって、差が見られるかどうか χ^2 乗検定³⁾を行った結果、有意差は見られなかった($\chi^2(2)=0.132, n.s.$)。つまり、習熟度と、STとSWでの産出の相違に関係性が見られない可能性が示唆された。

表4 目的語の主題化のタスクによる相違 (産出者数)

| | STとSWが同じ | STとSWが異なる |
|----|----------|-----------|
| 初級 | 7 | 10 |
| 中級 | 46 | 57 |
| 上級 | 14 | 16 |
| 計 | 67 | 83 |

このような結果から、習熟度が上がってもSTとSWの表現が一致しているわけではないと考えられる。本研究の結果は、村田(2019)を支持しない結果となった。

次にSTとSWで産出がどのように異なるかを以下の表5に示す。「格」は「格助詞」、「主」は「主題化」で「は」や「も」などを含む。「無」は「無助詞」である。SWで主題化した26名は、格助詞からの主題化が最も多く、STで主題化した22名

も格助詞からの主題化が最も多かった。STとSWで使用する表現が異なる場合どのように異なるのであろうか。

以下にSWとSTで主題化するかしないかに違いが見られた場合を実際に取り上げ、検討することとする。

例1) SW主題化→ST格助詞

SW：中の食べ物はもう犬が全部食べてしまいました。

ST：犬がバスケット (バスケット) 中の食べ物を全部食べちゃって 【中級：KKD38】

例2) ST主題化→SW格助詞

ST：突然、中に出して二人はびっくりして、中を見たら中身の食べ物は全部、食べられていました

SW：犬がサンドイッチとリンゴを食った跡が残っていました 【上級：KKD33】

ST：二人は一そのバスケットの中のサンドイッチは、犬に食べられたことを見つけ、

SW：二人が作ったサンドイッチが全部犬に食べられました。 【上級：CCM40】

例1)の場合、SWで主題化して産出していたが、STでは「犬が食べ物を食べちゃった」という単純な文で産出していた。一方、例2)のようなSTで主題化していたが、SWで格助詞を使用していた場合、「サンドイッチとリンゴを食った跡」または「二人が作ったサンドイッチ」のように修飾節の使用が確認できた。

以上の結果から、目的語の主題化は習熟度が上がってもSTとSWで使用する表現が一致するわけではなく、単純な文での格助詞の使用から、「は」

表5 目的語を表す形式のSWとSTでの相違 (産出者数)

| SW | 格 | 格 | 格 | 格 | 主 | 主 | 主 | なし | なし | なし | 無 | 無 | 無 | |
|----|----|----|---|----|----|---|---|----|----|----|---|---|----|----|
| ST | 格 | 主 | 無 | なし | 格 | 主 | 無 | 格 | 主 | 無 | 格 | 主 | なし | |
| 初級 | 3 | 2 | 2 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 10 |
| 中級 | 10 | 10 | 3 | 2 | 14 | 4 | 5 | 3 | 0 | 1 | 1 | 3 | 1 | 57 |
| 上級 | 1 | 3 | 0 | 0 | 5 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 3 | 0 | 16 |
| 計 | 14 | 15 | 5 | 3 | 21 | 5 | 5 | 4 | 1 | 1 | 2 | 6 | 1 | 83 |

を使用した主題化を産出するようになり、その後、習熟度が上がるとより複雑な文での格助詞を使用するようになる傾向があることが分かった。

5. 2. 2. 「に」の主題化「には」の産出

「に」の主題化である「には」についても以下で、タスクによる産出の違いがあるのかについて検討する。

まず、ST、SW 1, 2 を対象に「には」を含む文をすべて収集する。そして、その収集した「には」の用法が別課題でも同様に産出されているかを調査するため、同じ場面の別課題の記述を収集する。その結果を表6に示す。

表6 「には」を表す形式のSWとSTの相違

(産出者数)

| | STのみ | SWのみ | 同じ | 異なる | 合計 |
|----|------|------|----|-----|----|
| 初級 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 中級 | 4 | 8 | 2 | 1 | 15 |
| 上級 | 2 | 6 | 1 | 2 | 11 |
| 合計 | 7 | 14 | 3 | 3 | |

中級以降、SWのみの使用がもっとも産出が多い。しかし、産出がSTとSWで一致する対象者は多くない。しかし、中級と上級では「には」の使用はSTに比べSWのほうが多い結果であった。「には」を使用することは複雑化であるのだろうか。STとSWでどのような違いがあるのか以下で見ていくこととする。

表7 「に」の主題化のタスクによる相違

(産出者数)

| | ST | 格 | なし | SW | 格 | なし |
|----|----|---|----|----|---|----|
| 初級 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 中級 | 4 | 1 | 3 | 8 | 4 | 4 |
| 上級 | 2 | 2 | 0 | 6 | 3 | 3 |
| | 7 | 3 | 3 | 14 | 7 | 7 |

表7はSTで「には」を産出した場合、SWで格助詞を産出、または該当する記述がない人が何名いるかを示している。SWについても同様である。STにおいてもSWにおいても、格助詞の使用と記述がない場合に差は見られなかった。

例4) SW主題化「には」→ST格助詞

SW: バスケットの中には、犬が食べて残ったサンドイッチとリンゴが入っていたので、ケンとマリは失望しました。

ST: あーケンとマリはバスケットの中にあるゼンドイッチ(サンドイッチ)を犬が全部食べて(食べて)しまうことを、しまし、知ってまし、知りました。

【上級:KKD10】

SW: バスケットの中には何も残っていませんでした。

ST: びっくり(びっくり)した二人が、バスケットの中を、見ると、あー、サンドイッチ、す、サンドイッチがなくなって(なくなって)しまいました

【中級:KKD18】

SWでは文が短く明瞭な表現を使用しているのに対して、STは文が長く、フィラーや言い直しが多い。これはSWにおいてプランニングの効果があるのではないかと考えられる。

例5) SW格助詞→ST主題化「には」

SW: その時に、マリはもう起きました。

ST: そして、その時には、えっとマリさんが、えっと起きました

【中級:EAU31】

例6) SW主題化「は」→ST主題化「には」

SW: そのバスケットの中はなにもなかったです。

ST: その、中には、何も、おーありません

【初級:KKD60】

一方、STの「には」のあとにはフィラーや言い淀みが見られ、文を短く切っていることがわかる。初級、中級初期は「には」をプランニングした上で使用しているわけではない可能性が考えられる。

5. 2. 3. 考察

目的語と「に」の主題化について、具体的に産出を比較した結果、目的語、「に」の主題のどちらの主題化についてもSTとSWで一致しない傾向が見られた。ただし、目的語は習熟度が上がるにしたがって、単純な文での格助詞の使用から、「は」による主題化、複雑な文での格助詞の使用へとつながっていくが、「に」では初級でもSTに主題化の産出が見られ、習熟度が上がるとSWで使用が見られる結果となり、目的語の主題化と「に」の主題化「には」で異なる傾向が見られた。

6. 結論

口頭産出データと作文産出データの主題化の発達過程が同様の過程を経るかどうかについて確認した結果、同様の過程を経ない可能性が示された。口頭では主題化の発達過程に「主語(は)→目的語(は)→には→では」という広がりの確認できたが、作文においては広がり確認できなかった。

また、口頭産出において主題化された文は、作文産出においても主題化されるのかという点について確認したが、口頭で主題化されたものが必ずしも作文で主題化されるわけではないことがわかった。目的語の主題化では、習熟度が上がってもSTとSWで同様の表現を使用するわけではなく、習熟度が上がることで、格助詞の使用、主題化、格助詞を使用した複雑な文の産出へとつながる可能性があることが分かった。また、「に」の主題化である「には」の使用においても口頭と作文の産出は一致せず、プランニングの効果が「には」の産出に結びつかない可能性がある結果となったと考えられる。

7. 今後の課題

今後の課題として、「には」など「格助詞+は」は産出された数が少なかったため、別に課題を設

けるなどして調査をする必要があると考えられる。また、なぜ別課題では主題化しなかったのかについてインタビュー調査を行うなど、より詳細な調査をする必要もあるのではないかと考えられる。

注

- 1) Hatch, E., & Lazaraton, A. (1991) をもとに産出した。詳しくは参照されたい。
- 2) 処理可能な段階の認定については、峯 (2015) に倣い、1人目が特異な場合である可能性もあることから、2人目の産出が確認できた段階を処理可能な段階として認定する。
- 3) 統計処理はjs-STAR version 9.7.8jを用いて行った。

参考文献

- 迫田久美子 (2019) 「話すタスクと書くタスクに見る日本語のバリエーション」野田尚史・迫田久美子 (編) 『学習者コーパスと日本語教育研究』くろしお出版
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』第6巻3号, pp.93-110
- 峯布由紀 (2015) 『第二言語としての日本語の発達過程』ココ出版
- 村田裕美子 (2019) 「ストーリー描写課題に現れる日本語学習者の「話し言葉」と「書き言葉」の比較分析—習熟度の差はどのように反映されるのか—」『日本語教育』173号
- Hatch, E., & Lazaraton, A. (1991) *The research manual: Design and statistics for applied linguistics*. New York: Newbury House.
- Kawaguchi, S. (2010). *Learning Japanese as a second language: A Processability Perspective*, New York: Cambria Press
- Kawaguchi, S. (2015). The development of Japanese as a second language. In C. Bettoni & B. Di Biase (Eds.), *Grammatical development in second languages: Exploring the boundaries of Processability Theory*, pp.149-172.: European Second Language Association.

資料

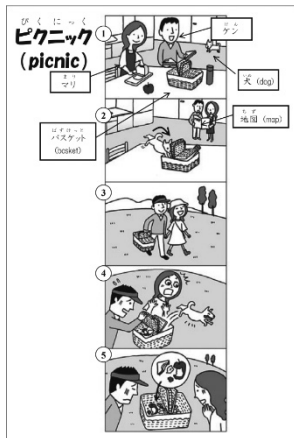


図1 ストーリーテリングイラスト1

迫田他 (2016) p.99より